

韓国語における可能表現の意味特徴と用法

— 日本語の可能表現を手掛かりとして —

高 恩淑

要旨

本稿では、可能表現の日韓対照研究の準備的考察として、日本語の可能表現を手掛かりとしながら、韓国語の可能表現の意味特徴とその用法について考察を行った。「可能の生起条件」の違いに注目し、可能表現の意味を大きく「能力可能」と「状況可能」に分けて、韓国語の可能形式「*ha-l swu issta / epsta*」「*ha-l cwul alta / moluta*」「*moshata / ha-ci moshata*」の間の意味、用法の違いや重なりについて考察し、次の結果を得た。

- ① 「*ha-l cwul alta / moluta*」は、もっぱら動作主の内的条件による「能力可能」、特に「動作実現のための知識や技能を持っている（持っていない）」という意味を表すのに対し、「*ha-l swu issta / epsta*」は、動作主の内的条件による「能力可能」や動作主の外的条件による「状況可能」も表しうる。
- ② 「*ha-l swu issta / epsta*」と「*moshata / ha-ci moshata*」とでは、基本的に前者がポテンシャルな可能・不可能を表しやすいのに対し、「*moshata / ha-ci moshata*」はアクチュアルな非実現を表しやすい。

韓国語の可能表現は「可能の生起条件」や「出来事の種類」（「ポテンシャル」か「アクチュアル」か）によって異なる可能形式を用いる点で、日本語の可能表現とは大きく異なる。韓国語母語話者に対する日本語教育においては、日本語の可能表現が韓国語のさまざまな可能表現に対応しうることを理解させることが重要であり、韓国語の可能表現に対応させる形で用例を示す必要がある。

キーワード：「*ha-l swu issta / epsta*」、「*ha-l cwul alta / moluta*」、「*moshata / ha-ci moshata*」、能力可能、状況可能

1 はじめに

1.1 研究の目的

これまで、日本語と韓国語の文法体系に関する対照研究は多く成されてきたが、可能表現に対する対照研究は数が少ない。これは、韓国語研究において可能表現を一つの文法カテゴリーとして扱うことが確立されておらず、可能表現の対照研究のための基盤が整備されていないことに起因すると考えられる。筆者は、日本語と韓国語の可能表現を対照し、韓国語母語話者に対する日本語教育、日本語母語話者に対する韓国語教育で活用できる可能表現の体系を示すことを目指して研究を行っているが、そのためにはまず可能表現の対

照研究のための基盤整備を行う必要がある。本稿では、その一環として、日本語の可能表現を手掛かりとしながら、韓国語の可能表現の意味特徴とその用法について考察を行う。

1.2 研究対象及び方法

本稿では、韓国語の可能表現において生産的に作られる文法的な形式、すなわち「*ha-l swu issta / epsta*¹（ある事を成す可能性や力がある / ない）」、「*ha-l cwul alta / moluta*（ある事を成す方法を知る / 知らない）」、「*moshata / ha-ci moshata*（ある事ができない / ある事をすることかできない：不可能専用）」を可能形式として捉え、考察を行う。これらは、可能表現以外の用法で用いられることもある²が、可能表現の意味を持たない用法は考察の対象から除く。語彙的な可能表現の役割を担う“-cita（「ある状態になる」）”“-toyta（「ある状態になる・出来上がる」）”“-calhata（「ある動作・行為が上手だ」）”“-manhata（「～（する）に値する」）」も紙幅の関係で考察の対象から除く。

研究方法としては、対訳版と翻訳版のある言語資料を用いて、可能形式を述語とする現代日本語と韓国語の可能表現の用例を収集し、その用法と意味特徴を明らかにしていく。言語資料は、主に翻訳版のある日本語と韓国語の小説および対訳版のあるネット上の新聞社説から 1443 例を収集し、検討した。用例提示において、出典がないものは基本的に作例である。

2 可能表現の定義

まず、可能表現の定義について見ていくことにする。

時枝誠記（1955:180）は、『国語学辞典』で「可能とは、ある動作が、その動作の主体において実現する状態を表す」と述べており、松村明編（1971:124）の『日本文法大辞典』では、可能を「有情物（人またはその他の動物）が動詞によって表される動作をする可能性を有する意を表す」としている。

渋谷勝己（1993）は、可能表現を「人間その他の有情物（ときに非情物）がある動作（状態）を実現することが可能・不可能であること、あるいはあったことを表す表現形式類を、その形式・意味・構文その他の特徴について総合的にとらえたものである」としながら、「「ある動作ができる」というときの「ある動作」とは、常に話し手が期待する（待ち望む）動作、より正確には動作主体が期待している（待ち望んでいる）であろうと話し手が考える動作でなければならない」と述べている。

¹ 韓国語の表記は「Yale 方式」で行うことにする。

² 例えば、「*ha-l cwul alta / moluta*」は、単に動作主がある事実を知っているか否かを表わす（例：「*onuli ne sayngilinci mollassta*（今日が君の誕生日とは知らなかった）」場合にも用いられる。「*moshata / ha-ci moshata*」も、「*ku yenghwanun asik mos pwassta*（その映画はまだ見ていない）」のように、「（まだ）～していない」といった未完結や未経験などを表すことがある。

一方、韓国語における可能表現の研究で可能、または可能表現について定義しているものは管見の限りでは見当たらない。これは、上述したように韓国語において可能表現を一つの文法カテゴリーとして扱っている研究がほとんどないことにも起因するだろう。『標準韓国語大辞典』や『延世韓国語辞典』に、「可能性」を「これから実現しうる性質」とし、「可能」を「し得る、またはできる」と記されているだけである。よって、本稿では、日本語の可能表現の定義を参考にして、可能表現を「動作主が期待している（待ち望んでいる）であろうと話し手が考える、もしくは話し手本人が期待している動作・状態が実現する見込みがあるか否か、あるいは実際に実現するか否かを描き出す表現」とであると捉える。また、可能表現を表す文を可能文、可能表現を構成する述語形式を可能形式と称する。

3 韓国語における可能表現の様相 — 先行研究を中心に

日本語において可能形式といえば、一般に「可能動詞」と「V-ラレル」³、「(スル) コトガデキル」⁴が挙げられるが、韓国語には日本語の可能動詞のような、一般的な意味での「可能」を表す専用の可能形式がない。形式名詞「swu」、「cwul」や不可能の意味を持つ副詞「mos」、または補助動詞「-ci moshata」が文法化した形式「ha-l swu issta / epsta（ある事を成す可能性や力がある / ない）」、「ha-l cwul alta / moluta（ある事を成す方法を知る / 知らない）」、「moshata / ha-ci moshata（ある事ができない / ある事をする事かできない：不可能専用）」はあるが、日本語の可能動詞とは形態的に異なる。要するに、韓国語の可能表現は日本語の可能動詞のような統語的な可能形式を持たず、語彙的なもので成り立っている点で日本語の可能表現とは大きく異なる。

また、現代日本語における可能表現の研究は形式より意味を優先とするアプローチが多い⁵のに対し、韓国語では可能表現を一つの文法カテゴリーとして扱っている研究が少なく、意味よりも形式を重視したアプローチが主流である。例えば、「可能、能力、方法」を表す「swu」、「cwul」と「不可能、不能力」を表す「mos」は別々に扱われることが一般的で、前者が形式名詞の研究で後者が副詞や否定辞の研究の中で別々に取り上げられている（李翊燮・蔡琬（1999）、南基心・高永根（2007））。つまり、これらの形式によって表される意味の違いや重なりに関する研究はほとんど成されていない。意味の記述についても、モダリティの観点から命題の蓋然性や可能性などが言及されるだけで、「可能表現」として独立の意味的・機能的類型を立てることは行われていない。要するに、韓国語研究において、可能表現は文法的・意味的なカテゴリーとして明確に取り出されておらず、輪郭があいまいであると言える。

³ 一段動詞の語幹およびカ変動詞の「来(こ)」に助動詞「ラレル」のついた形。「ラレル」は可能専用の助動詞ではなく、受身や自発、尊敬の形式にも用いられる。可能に特化した「レル」（いわゆるラ抜き表現）も「ラレル」に準じて考える。

⁴ 「勉強する」が「勉強できる」になるようなサ変動詞の可能形「デキル」もある。

⁵ 渋谷勝己（1993:4）参照。

このように、韓国語研究において、可能表現が文法的・意味的なカテゴリーとして明確に定められていないことから、日本語と韓国語の可能表現の対照研究も少ない。「ha-l swu issta / epsta」、「ha-l cwul alta / moluta」、「moshata / ha-ci moshata」と日本語の可能表現の対照を行ったものは、管見の限りでは、鄭寅玉（1997）のみである。金美仙（2006）は、「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」をそれぞれ一つの分析的な述語形式として扱いながら、両形式の正確な意味記述を試みている。日本語と韓国語の可能表現に関する対照研究ではないが、日本語の可能表現を参考にして考察を行っている点から、ここで紹介する。これ以外の可能表現に関する先行研究は関連する各節で取り上げる。

3.1 鄭寅玉（1997）

鄭寅玉（1997）は、日本語と韓国語の可能表現に関する対照研究がほとんどなされていない中、両言語における可能表現の形式と意味について考察を試みた点で、意義があると言える。鄭寅玉（1997）は、日本語の可能表現の文を韓国語で訳す際に用いられるものを基準とし、「swu issta」「cwul alta」「i, hi, li, ki」「cita」「calhata」「manhata」を韓国語の可能表現を表す形式として捉えている。日本語の可能表現の意味（「潜在系可能」と「実現系可能」）とその用法に、韓国語の可能表現を照らし合わせながら、韓国語の可能形式が持つ形態・統語・意味的な特徴を示そうとしている。

すでに研究のある日本語の可能表現を踏まえて、韓国語の可能表現の形式や意味特徴を立てようとする試みはよいが、各形式によって表わされる意味の違いや重なりに関する記述がきちんと成されていない。また、韓国語の可能表現の代表的な可能形式の一つとも言える「moshata / ha-ci moshata」については全く言及していない。筆者が集めた実例（約1,400）において、可能表現の約50%以上が否定文に現れている。これは可能表現の特徴として捉えられるが、鄭寅玉（1997）では、本文で用いられる例のほとんどが作例で肯定文に偏っているために、可能表現の特徴とも言える否定文の意味・用法について言及がない。

3.2 金美仙（2006）

金美仙（2006）は、意味上類似する可能形式「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」を一つの分析的な述語形式として扱っている点で意義がある。金美仙（2006:311）は、「ha-l swu issta / epsta」と「ha-l cwul alta / moluta」の意味を比較しながら、「「ha-l swu issta / epsta」は可能を表わしているが、「ha-l cwul alta / moluta」は主体の能力や動作に対する話者の評価の意味を表わす」としている。このような金美仙（2006）の考えは基本的に正しいと思われるが、「ha-l cwul alta / moluta」の意味は必ずしも「能力への評価」を表すとは限らない。何故なら、「ne phiano chi-l cwul al-a?（あなたピアノ弾けるの?）」と尋ねる場合は、単に主体の能力を訊くのではなく、「果たして主体にピアノを弾く能力があるだろうか」という話し手の気持ちが入ることから「主体の能力への評価」の

意味が読み取れるが、「ani, (piano) chi-l cwul mol-la. (ううん、(ピアノ) 弾けない) という答えに、話し手本人が自分の能力を評価しているという意味は読み取りにくいからである。

「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」の意味は、単に「能力可能」を表すか「能力への評価」を表すかで分けられるのではなく、動作主の有無や人称、文の種類、可能を成り立たせる条件などが関わっていると考えられる。特に、「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」の用法の違いにおいて、可能を成り立たせる条件が動作主の心理的なものや能力などによる内的条件なのか、それとも動作主を取り巻く外的条件によるかは、重要な要因となる。金美仙 (2006) は、鄭寅玉 (1997) と同様に韓国語の可能表現の代表的な可能形式の一つである「moshata / ha-ci moshata」について考察を行っていないが、意味上において類似する可能形式「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」の使い分けを試みている点は注目すべきである。

4 韓国語における可能表現の用法 — 日本語の可能表現を手掛かりとして

渋谷勝己 (1993:4) は、「現代標準語の可能表現の形式間において意味の違いがほとんどないために、いずれの可能形式を取り上げて論じても、結果的にほぼ同じ分析結果に帰着する」と述べている。実際、データをもとに分析を試みた結果、日本語における可能形式は、意味上においてさほど変わりはないが、「可能動詞」と「V-ラレル」の方が話し言葉的で会話文に多く用いられるのに対し、「(スル) コトガデキル」は書き言葉的で、論理的な説明文によく現われるという傾向が見られる。

一方、韓国語の可能表現において、文体の違いだけで可能形式を使い分けることは非常に難しい。不可能専用の可能形式「moshata / ha-ci moshata」において、短い形の「moshata」の方が話し言葉的で会話文に多く用いられる傾向があるが、音節が長い動詞や状態動詞に「ha-ci moshata」が付く点から考えると簡単には規定できない。

韓国語の可能形式について考えると、文体よりむしろ形式間の意味に違いがあるようである。例えば、日本語で「(私は自転車に) 乗れない」といった場合、韓国語では①「(na-nun cacenke-lul) tha-l swu epsta」、②「(na-nun cacenke-lul) tha-l cwul mollu-nta」、③「(na-nun cacenke-lul) mos ta-nta」の三つに訳せる。とはいえ、三つの形式が全く同じ意味で捉えられるわけではない。①「tha-l swu epsta」が動作主の何かしらの事情 (能力欠如、不利な状況または不都合) により、自転車に乗れないことを言い表すのに対し、②「tha-l cwul mollu-nta」は、動作主が自転車の乗り方を知らないために、自転車に乗れないといった動作主の後天的な能力欠如を言い表す。一方、③「mos ta-nta」⁶は、①と②

⁶ 「mos ta-nta」は、「ta-ci mosha-nta」の形で用いられることもあるが、この場合、「乗ることが出来ません」のようにやや書き言葉的になる。

のいずれの意味も表しうる。これは、次のように「荷物が多くて／足を怪我して」や「もともと」という言葉を入れることでより明らかとなる。

- (1) 私は荷物が多くて／足を怪我して自転車に乗れない。
- a. na-nun **cim-i man-hase / tali-lul tachyese** cacenke-lul tha-l swu epsta.
 b. *⁷na-nun **cim-i man-hase / tali-lul tachyese** cacenke-lul tha-l cwul mollu-nta.
 c. na-nun **cim-i man-hase / tali-lul tachyese** cacenke-lul mos ta-nta.
- (2) 私はもともと自転車に乗れません。
- a. ?na-nun **wenlay** cacenke-lul tha-l swu epsta.
 b. na-nun **wenlay** cacenke-lul tha-l cwul mollu-nta.
 c. na-nun **wenlay** cacenke-lul mos ta-nta.

このように、韓国語の可能形式は日本語と違って、可能形式間に意味の違いがあり、その用法も異なっている。要するに、「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」「moshata / ha-ci moshata」は韓国語において（不）可能を言い表すという点で共通しているが、事態の生起を可能にする条件（以下「可能の生起条件」）が異なるため、違った意味、用法をもつと考えられる。

以上のことを踏まえ、本稿では「可能の生起条件」を意味分類の基準とし、韓国語の可能表現を大きく「能力可能」と「状況可能」の二つに分けて考察を試みる⁸。「可能の生起条件」が動作主本人の能力や特性などの内的条件にあるのを「能力可能」、動作主を取り巻く状況や都合などの外的条件にあるのを「状況可能」とする。以下では、「可能の生起条件」を基準とし、韓国語の可能形式間における意味、用法の違いや重なりについて見ていく。

4.1 「能力可能」

ここでは便宜上、可能・不可能の意味を言い表す「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」と不可能の意味だけを言い表す「moshata / ha-ci moshata」に分けて、見ていくことにする。

⁷ 本稿では、非文法的な文の場合「*」、文法的に間違っていないが文脈から不自然な場合「#」、非常に不自然な文の場合「??」、やや不自然な文の場合「?」を該当文の前に施す。その判断は筆者の内省によるものである。

⁸ 渋谷勝己（1993）は、「可能の意味は、大きく「能力可能（主体の持つ能力によってある動作を実現することが可能であることを表すもの）」と「状況可能（主体の外の状況に主体がある動作を行うことを妨げるような条件がないためにその動作を実現することが可能であることを表すもの）」の二つに区別できると述べている。

4.1.1 「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」

次の例は、人やモノに備わっている能力によって事態の実現が可能になることを表している可能表現で、特定の時間軸に位置づけることのできない人やモノの性質を表している。

- (3) 太郎は3ヶ国語ができる。
- (4) 「浪花節やれる？」(ルージュ)
- (5) 24時間、戦えますか。(五体不満足)
- (6) 「あのタワーのほうに車は入れますか？」(ルージュ)

これらは、日本語の可能表現をもとに考えると、いずれも動作主の能力を表す文であり、特にその違いが現れない。しかし、韓国語に訳してみるとその違いが浮き彫りになる。すなわち、(3)、(4)が「ha-l swu issta」と「ha-l cwul alta」の二つの可能形式が使えるのに対し、(5)と(6)は「ha-l swu issta」しか使えない。それは、二つの可能形式「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」における「事態実現の要因」が異なるからである。

「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」は、両者とも「動作主の能力による事態実現の可能性」を表している点で共通しているが、両形式の「事態実現の要因」を探っていくとその違いが明らかとなる。「ha-l swu issta / epsta」の場合、動作主が当該の動作を行う能力を備えていることが前提になっている。つまり、動作主が意図してある事態を引き起こそうとした時、その事態の実現を左右するものは動作主に備わっている能力で、その能力の拠り所は特に問題にならない。それに対し、「ha-l cwul alta / moluta」は、「動作主が当該の動作を遂行する知識や技能を習得しているか否か」によって事態の実現が左右される点が大きく異なる。要するに、「ha-l swu issta / epsta」は「動作主が恒常的に有している能力」に「事態実現の要因」があるのに対し、「ha-l cwul alta / moluta」は「動作主が後天的に習得した知識や技能による能力」が「事態実現の要因」として働くのである。

従って、(5)に「ha-l cwul alta」を用いると、動作主に向けて「24時間、戦うための知識や技能があるか」といった問いになり、動作主の単なる実現能力を問う文にはならない。また、(6)の場合は、非情物動作主で動作主の知識や技能を問うこと自体が考えられない文であるため、「ha-l cwul alta」を用いることができない。よって、次のように動作主における身体的な能力欠如が事態の実現を妨げる要因となる場合、「ha-l swu epsta」は用いられるが、「ha-l cwul moluta」は動作主の持つ知識や技能の欠如による不可能や非実現の意味を表すために用いることができない。

- (7) 僕の両脚はやはりもういけならしいと、医者がいったんだ。(中略) 僕はもう、一人で街を歩けない、と学生がやはり窓の向うの夜を見つめながらいった。フランス人に一生会えない。船に乗ることも泳ぐこともできない。(他人の足)

前述のように、金美仙 (2006:311) は、「*ha-l swu issta / epsta*」「*ha-l cwul alta / moluta*」の意味を比較しながら、「両形式は、何らかの形で「能力」を表す点において共通しているが、(中略)「*ha-l swu issta / epsta*」は能力を可能の要因として捉えているが、「*ha-l cwul alta / moluta*」は、能力を主体の属性として評価的に表わす」としている。

このような金美仙 (2006) の考えは基本的に正しいと思われるが、「*ha-l swu issta / epsta*」と「*ha-l cwul alta / moluta*」の意味を「能力可能」か「能力への評価」かによって分けるよりも、両形式の「事態実現の要因」が異なると見て、「*ha-l cwul alta / moluta*」は、基本的に「動作主の習得した知識や技能による能力の有無を言い表す可能形式である」と規定した方がより正確であろう。

4.1.2 「*moshata / ha-ci moshata*」

この項では、不可能専用の可能形式である「*moshata / ha-ci moshata*」の意味的な特徴とその用法を明らかにするために、他の可能形式「*ha-l swu epsta*」「*ha-l cwul moluta*」と対照しながら考察を試みる。

① 恒常的な能力欠如を表すもの

「*moshata / ha-ci moshata*」は、次のように動作主の特性とも言える恒常的な能力欠如を言い表す。(以下、紙幅の関係で韓国語は可能形式が付く述語だけを「Yale 方式」で表記する。)

- (8) 「ぼくは運転できないんです (*wuncen-ul mos hayyo*)」(ルージュ)
- (9) 「水着は持ってこなかったの？」
「泳げないの (*swuyeng mos hayyo*)」(ルージュ)
- (10) 「彼女は飲めないんだ (*mos masye*)」(ルージュ)

このように、会話文において「動作主の恒常的な能力欠如」を表す文には、不可能専用の可能形式の中で短い形「*moshata*」が多く用いられる。「*ha-ci moshata*」に置き換えることもできるが、その場合「(スル) コトガデキナイ」のような書き言葉的な文体となる。

用例(8)、(9)は、「*ha-l cwul moluta*」を用いることができるが、その場合、文の表す意味は動作主の持つ知識や技能の欠如によって、事態の実現する見込みがないことを言い表すようになる。また、特別な知識や技能の習得に関わりのない用例(10)のような文に「*ha-l cwul moluta*」を用いると不自然な文になる。

一方、用例(8)~(10)は、用例(3)~(5) (*thalo-nun 3kay kwuke-lul ha-l swu issta* (太郎は3ヶ国語ができる)のタイプ)と同様に動作主の能力を表しているにもかかわらず、「*ha-l swu epsta*」を用いると不自然な文になってしまう。これは、本来可能表現が、動作主の動作・

状態の実現への期待を言い表すものであることから、動作主に備わっている能力だけで事態が実現する見込みがある場合（「能力可能」の肯定文）は、わざわざなぜ事態の実現が可能であるかなど示す必要がないのに対し、事態が実現する見込みがない場合（「能力可能」の否定文）は、なぜ動作主が意図しても実現する見込みがないのかを示す必要が生じるからであろう。「moshata / ha-ci moshata」は、そのままの形で「動作主の恒常的な能力欠如」による事態の不可能を表すことができるが、「ha-l swu epsta」は、文脈の明確な支えがないと「動作主自らの能力欠如によるもの」である事を表すことが出来ない。

従って、「ha-l swu epsta」を用いる際には、次のように当該動作の出来ない能力欠如の要因を文中や段落の中に明示しなければならない。用例(11)~(13)は、「ha-l swu epsta」が用いられているが、「moshata / ha-ci moshata」とも自由に置き換えることができる。

- (11) しかし、砂場に行っても、手のないボクは自分で砂遊びをすることができない (molaynoli-lul ha-l swu epsta)。(五体不満足)
- (12) ボクは、手足がないからボクなんだ。そして、誰も「ボク」になることはできない (hyungnavnav-l swu epsta)。(五体不満足)
- (13) 雑巾を手で挟むことができないため、壁や机を拭くことはできない (takku-l swu-nun eps-ess-ta)。(五体不満足)

② 属性規定的なもの

次のように文の表す事態が実現しない個別の理由は特に問題にならず、単に主題にたつ人やモノの属性を規定する可能表現（「人は水がないと生きていけない」のタイプ）には、可能形式「ha-l swu issta / epsta」が用いられる。このタイプは、「社会的通念」として捉えられる事柄が述べられる。従って、動作主個人が持つ知識や技能による能力を言い表す「ha-l cwul alta / moluta」を用いることはできない。

- (14) 「水は人を殺すことができるが (cwuki-l swu iss-ciman)、ビールは大丈夫だ」という欧州のことわざがある。(中央日報 8月 15日)
- (15) しかし人は自動車なしに生きることはできても、食糧がなければ生きられない (sa-l swu epsta)。(中央日報 6月 30日)
- (16) 人は生きていく以上どうしても苦しみを免れることができないのだ (pesena-l swu-ka epsta)。(ルージュ)
- (17) マーティン・ルーサー・キング牧師は、憤怒だけで世の中を変えることはできない (bakkwu-l swu epsta) と語った。(中央日報 6月 24日)

用例(15)～(17)は、不可能を表す可能表現であるから、一見「moshata / ha-ci moshata」と置き換えることもできそうだが、実例から考えると、このタイプにおいて不可能を表すほとんどの用例が「ha-l swu epsta」を用いている。これは、「ha-l swu epsta」の方が「moshata / ha-ci moshata」より、ポテンシャルな出来事を表す可能表現に適しているからである。つまり、「ha-l swu issta / epsta」は実現の有無は特に問題にならず、単に実現の可能性として存在するポテンシャルな出来事を表す可能表現に用いられやすい反面、特定の時間において具体的に表されるアクチュアルな出来事を言い表す可能表現には用いられにくいということである。

一方、「moshata / ha-ci moshata」はポテンシャルな出来事に限らず、現実世界におけるアクチュアルな出来事をも言い表すことが出来る。さらに言えば、「moshata / ha-ci moshata」は、基本的に動作主の当該の動作に対する意図はあるものの、能力が欠如しているか、もしくは動作主を取り巻く外的条件によって動作主の意図通りにできない事柄を描く可能形式であることから、「ha-l swu issta / epsta」に比べると、アクチュアルな出来事を述べるのにより適していると考えられる。実際、次の用例(18)、(19)は、ある特定の時間に置かれた動作主の一時的な不都合による非実現を表す「状況可能」の可能表現であるが、アクチュアルな出来事を表していることから、「moshata / ha-ci moshata」が用いられる。

- (18) とにかく彼女の気持ちをたしかめたいという思いが強くて、初台のく東京オペラシティ>で食事をしたのだが、ぎこちない会話しかできなかった (mal-pakkey ha-ci moshayss-ta)。(ルージュ)
- (19) 朝早く、起きて、庭で水を撒いた。出勤する父に会った。私が裸みたいな格好で水撒きをしているので、恥ずかしくて近寄れないようだった (takao-ci mosha-nun tus hayss-ta)。(ハネムーン)

これらは、特定の時間に関係付けられる出来事を言い表しているために、「ha-l swu epsta」に置き換えると不自然な文になる。

以下では、このような「状況可能」についてより詳しく見ていくことにする。

4.2 「状況可能」

ここで取り上げる「状況可能」は、「可能の生起条件」が動作主本人の能力や特性などによる内的条件にあるのではなく、動作主を取り巻く状況や都合などの外的条件にあるものを指す。その条件となる事柄は、通常文脈の中に与えられる。

韓国語の可能表現において、「状況可能」を表す可能形式は、「ha-l swu issta / epsta」と「moshata / ha-ci moshata」（不可能専用形式）に限られる。動作主が後天的に習得した知識や技能による実現の可能性を表す「ha-l cwul alta / moluta」を用いることはできない。

- (20) ふと、達郎もゲップをしてみたくなかった。(中略) ビールも飲んでいるし、いつでも出せる (ha-l swu issta)。(義父のヅラ)
- (21) もうこの家でやることがないから、どこにでも行ける (kal swu isse)、と裕志は言った。(ハネムーン)
- (22) 「ええと……イチローはアメリカだから、ぼくらでも会えないんですけど (manna-l swuka eps-nunteyyo)」(ホットコーナー)
- (23) 「あんな寒そうな、ものすごい波の中で、僕だったら心細くて遊んでられないな (mos no-l kes kath-untey)。」(ハネムーン)

「状況可能」の肯定文である用例(20)、(21)は「ha-l swu issta」を用いて、動作主を取り巻く状況や都合により、動作主の期待する事態が実現できることを言い表しているのに対し、「状況可能」の否定文である用例(22)、(23)は両者とも、動作主を取り巻く外的条件によって動作主の期待する、または意図する事態の実現が阻まれていることを言い表している。用例(22)は「ha-l swu epsta」、(23)は「moshata」が用いられているが、両者を置き換えても意味上の違いは生じない。

動作主の外的条件による実現の可能性を言い表す「状況可能」には、次のように文の表す事態が未来に関わる実現の可能性を表すことがある。その場合、用いられる可能形式は「ha-l swu issta / epsta」に限られる。

- (24) 「黒川さんがこれほど理屈っぽいとは思わなかったわ。動機なんていくらでもあるじゃない。いまよりもっと才能を発揮できるかもしれないし (palhwih-l swu-to iss-ultheyko)、やりたい仕事を選ぶ自由を獲得できるかもしれない」(ルージュ)
- (25) 「いや、自分の立つ場所をはっきりさせたいだけ。でないと人生をはじめられない (slcakha-l swu espe)。」(ハネムーン)
- (26) 「それでどうしたの？」
「友達のところへ行ったの。だって、もう帰れないよ (tolaka-l swu eps-canha)。
それって、一度死んだってことだし。」(ハネムーン)

用例(25)、(26)において、「ha-l swu epsta」を「moshata / ha-ci moshata」に置き換えると不自然な文になってしまう。「ha-l swu issta / epsta」は基本的にポテンシャルな出来事を表す可能表現に適している可能形式であることから、未来に関わる実現の可能性を表すことが出来るが、「moshata / ha-ci moshata」は「ha-l swu issta / epsta」に比べると、よりアクチュアルな出来事に適しているため、単にこれから先の未来における実現可能性を言い表す可能表現には用いにくいと考えられる。

4.3 本節のまとめ

以上、4では「可能の生起条件」の違いに注目し、韓国語の可能表現の意味を大きく「能力可能」と「状況可能」に分けて、可能形式「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」「moshata / ha-ci moshata」の間における意味、用法の違いや重なりについて考えてみた。その結果を示すと、次のようになる。

- ① 「能力可能」の可能表現において、「ha-l swu issta / epsta」と「ha-l cwul alta / moluta」は両者とも「動作主の能力による事態実現の可能性」を表している点で共通しているが、両形式の「事態実現の要因」が異なる。「ha-l swu issta / epsta」は、「動作主が恒常的に有している能力」に「事態実現の要因」があるのに対し、「ha-l cwul alta / moluta」は、「動作主が後天的に習得した知識や技能による能力」に「事態実現の要因」がある点で大きく異なる。
- ② 「ha-l cwul alta / moluta」は、もっぱら動作主の内的条件による「能力可能」、特に「動作実現のための知識や技能を持っている（持っていない）」という意味を表すのに対し、「ha-l swu issta / epsta」は、動作主の内的条件による「能力可能」や、動作主の外的条件による「状況可能」も表しうる。このような点から、「ha-l cwul alta / moluta」は「ha-l swu issta / epsta」に比べて使用場面が限られていると言える。
- ③ 「能力可能」の可能表現において、「moshata / ha-ci moshata」は、そのままの形で「動作主の恒常的な能力欠如」による事態の不可能を表すことができるが、「ha-l swu epsta」は、文脈の明確な支えがないと「動作主自らの能力欠如によるもの」である事を表すことが出来ない。
- ④ 単に主題にたつ人やモノの属性を規定する「能力可能」の可能表現（「人間は水がないと生きていけない」のタイプ）には「ha-l swu issta / epsta」が多く用いられるが、特定の時間におけるアクチュアルな出来事を言い表す可能表現には「moshata / ha-ci moshata」が用いられる。これは、「ha-l swu issta / epsta」が基本的にポテンシャルな出来事を言い表す可能表現に適している可能形式であるのに対し、「moshata / ha-ci moshata」はより具体的でアクチュアルな出来事を言い表す際に用いられやすい可能形式であるためである。
- ⑤ 「状況可能」の可能表現において、文の表す事態が未来に関わる実現の可能性を表す場合、基本的に「ha-l swu issta / epsta」が用いられる。これは、「ha-l swu issta / epsta」に比べると「moshata / ha-ci moshata」の方がよりアクチュアルな出来事に適しているため、単にこれから先の未来における実現可能性を言い表す可能表現には「moshata / ha-ci moshata」は用いられにくい。

このように、韓国語の可能表現は「可能の生起条件」や「出来事の種類」（「ポテンシャル」か「アクチュアル」か）によって異なる可能形式を用いる。この点、可能形式間において意味や用法の違いがほとんどない日本語の可能表現とは大きく異なる。

5 おわりに

本稿ではまず、先行研究を中心に日本語と韓国語の可能表現の様相を概観した。その中で、日本語と韓国語の可能表現を直接対照している研究を取り上げ、どのような点に注目して対照を行っているか、何が明らかとなり、残された問題点は何かを示した。次に、韓国語の可能形式「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」「moshata / ha-ci moshata」の間における意味、用法の違いや重なりについて考察した。

韓国語の可能表現は、「可能の生起条件」や「出来事の種類」（「ポテンシャル」か「アクチュアル」か）によって異なる可能形式を用いるが、日本語の可能表現は可能形式間において意味や用法の違いがほとんどない。韓国語母語話者に対する日本語教育においては、日本語の可能表現が韓国語のさまざまな可能表現に対応しうることを理解させることが重要である。教材や辞書においても、韓国語のさまざまな可能表現に対応させる形で用例を示す必要がある。

参考文献

<韓国語で出版されたもの>

●著書・論文

남기심・고영근 (2007) 『표준국어문법론』 개정판 탐출판사 (南基心・高永根 (2007) 『標準国語文法論』 改訂版 塔出版社：著者訳)

이 익섭・채 완 (共著) (1999) 『국어문법론강의』 서울：學研社 (李翊燮・蔡琬 (共著) (1999) 『国語文法論講義』 ソウル：學研社)

●辞書類

국립국어연구원 (1999) 『표준국어대사전』 서울：두산동아 (国立国語研究院 (1999) 『標準国語大辞典』 ソウル：斗山東亞)

연세대학교 언어정보개발연구원 (1998) 『연세한국어사전』 서울：두산동아 (延世大学言語情報開発研究院 (1998) 『延世韓国語辞典』 ソウル：斗山東亞)

<日本語で出版されたもの>

●著書・論文

金美仙 (2006) 「「할 수 있다」と「할 줄 알다」」、朝鮮語研究会編『朝鮮語研究 3』東京：くろしお出版

渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33 卷第 1 冊

鄭寅玉（1997）「日本語と韓国語の可能表現について—日本語の可能表現からみた韓国語の可能表現の形式と意味について」、『日本語教育研究』34 文化庁言語文化研究所

●辞書類

時枝誠記（1955）「可能」国語学会 編『国語学辞典』東京：東京堂

藤井正（1971）「可能」松村明 編『日本文法大辞典』東京：明治書院

用例出典

●小説

奥田秀雄（2004）『空中ブランコ』東京：文藝春秋

이영미（2005）『공중그네』서울：은행나무

乙武洋匡（1998）『五体不満足』東京：講談社

전경빈（1999）『오체 불만족』서울：창해

吉本バナナ（2000）『ハネムーン』東京：中央公論新社

김난주（2000）『허니문』서울：민음사

柳美里（2001）『ルージュ』東京：角川書店

김난주（2001）『루주』서울：열림원

●コーパス資料

中央日報の日本語版（インターネット上の社説「噴水台」2008年6月－12月）

<http://japanese.joins.com/info/bilingual/list.php>

（こう うんすく 言語社会研究科博士課程）